

新年おめでとうございます。

こうしてみなさんの顔を見ると、吸い込まれるような真っ直ぐな視線を感じます。

「『式』と名がつく行事を大切にできる学校にしよう。そういう西高生になろう。」

今、この体育館に流れる、『凜』とした空気。

これこそが、清水西高校の誇り(プライド)です。

清水西高校で良かった。 西高生で良かった。

そうした思いを抱けるようになるのは、

目には 見えないものを大切に。大切にしよう。

そう、一人一人が強く思うことがなければ、勝手にそう成ってくれるわけではありません。

『為せば成る。』 そうです。『為すことで、成るのです。』

みんなが共有する時間を大切にしよう。 みんなで使う場所をキレイに保とう。

自分たちの力で、キチンと並ぶことが出来る。

自然と顔が上がる。 背筋が伸びる。

『あたりまえ』のレベルは、上げることも、下げることもできる。

『あたりまえ』を大切にできる、『あたりまえ』のレベルが高い学校でいきましょう。

新しい年を迎えたみなさんに、一つ言葉を贈ります。

大正・昭和の時代の哲学者に、安岡正篤(まさひろ)さんという方がいます。

安岡さんは、陽明学(儒教の一派で、「心即理(心こそが道理)」、「知行合一(知識と行動は一致)」、「致良知(本来持っている良知を徹底させる)」ということを主要な思想としていて、要するに、知識だけでなく実践を重んじる「行動哲学」や 人間学の権威として知られ、政財界のリーダーの精神的支柱 (いわば御意見番)として、指導的な立場にあった人物といわれています。

今の『令和』という元号の前、『平成』の元号の考案者としても知られる方です。

先生方にも、以前『校長だより Vol.4』で御紹介しましたが、ある知人からの勧めで、

それ以来、常にカバンの中に入れている・・・、というあの方のことです。

『未見(みけん)の我』 これは、「まだ自分でも気づいていない、可能性に満ちた自分」  
という意味です。

今の社会は、明日のが誰にも分らないほど、激しく動いています。

しかし、社会がどうであろうと、みなさんの内側には、まだ目覚めていない『最高の自分』  
が眠っています。

私はこれまで、『式』と名の付く場面で、『決意と決断の違い』について伝えてきました。

『ここぞ』という時に、容易(たやす)い方向に流されてしまわぬように、

普段から、『ああなったら、こうしよう。そして時には、この場合は、あえてやめておこう。』

そんな風に、『思い』を固めていくのが決意。

『他(た)の選択肢を断ち切り、一歩踏み出す』のが、決断です。

三学期は短いですが、最も大事な時間です。

『失敗を恐れて動かない自分』を捨てる。『どうせ無理だろう。』という言葉で断つ。

そう決断した瞬間に、みなさんの前に 『未見の我』が現れます。

私は、先生方と、『同じ星を見て歩いていきましょう。』という言葉で合言葉にしています。

みなさんが、『未見の我』を探してチャレンジするなら、私たちは全力で、その過程で起こる  
『失敗』 を支えます。

そして、その先に手にする『成功』を共に喜びます。

三学期が終わる時、ここにいる全員が、「自分はここまでやれるんだ!」

そういう新しい自分に出会えていることを期待しています。

清水西高のプライドは、自分たちが作る。西高のプライドは、自分たちが高める。

「やってやる!」 力強い気持ちで三学期を全力で前に進んでいきましょう。

自分自身の『物語』を、自分の努力で創っていきましょう。

西高の物語を、ここにいるみなさんと創っていきましょう。

令和7年度 三学期始業式 校長訓辞とします。